

NETWORKWORLD®

TOP > 最新の記事 >

米国コンセントリー、40Gbpsのアクセス制御スイッチを11月に投入

2007年10月28日更新

米国のLANアクセス制御製品ベンダー、コンセントリーネットワークスの会長兼最高技術責任者（CTO）ジェフ・プリンス氏は2007年10月19日、香港で本誌インタビューに答え、同社のアクセス制御スイッチ「LANShield Switch」の新型を2007年11月に発表することを明らかにした。同氏によると、新型は192コアの高性能CPUを搭載し、LAN内におけるユーザーのアクセス制御、アクセス状況の可視化、マルウェア制御を最大40Gbpsのスループットで処理することが可能だという。

現在、企業では内部統制への対応が急務となっており、情報システムを利用するすべてのユーザーの行動を制御かつ可視化し、セキュリティポリシーに沿って不正な行動を抑止することが求められている。この動きは、米国と日本だけでなく、日米のグローバル企業と取り引きする諸外国の企業の間でも活発になっている。



▲香港でインタビューに応じるプリンス会長。同氏は、コンセントリーネットワークスの共同創業者としても知られている。

こうした中、コンセントリーでは、LANアクセス制御コントローラ「LANShield Controller」とアクセス制御スイッチ「LANShield Switch」の2シリーズをラインアップしている。両シリーズは、ネットワークにアクセスするユーザーの認証および端末の状態をチェックし、ネットワークへのアクセスを制御するネットワークアドミッションコントロール（NAC）機能を搭載。アクセスポリシーに基づいてユーザー単位にアクセス制御を行うほか、ネットワークに接続しているユーザーの状態をリアルタイムにモニタリング分析し、レポートを行うことが可能だ。既存製品は128コアのCPUを搭載し、最大10Gbpsのスループットを実現する。

両シリーズは、ネットワークにアクセスするユーザーの認証および端末の状態をチェックし、ネットワークへのアクセスを制御するネットワークアドミッションコントロール（NAC）機能を搭載。アクセスポリシーに基づいてユーザー単位にアクセス制御を行うほか、ネットワークに接続しているユーザーの状態をリアルタイムにモニタリング分析し、レポートを行うことが可能だ。既存製品は128コアのCPUを搭載し、最大10Gbpsのスループットを実現する。

プリンス氏は、「既存の128コアCPU搭載モデルでは、処理の一部をASICで行っているが、192コアのCPUを搭載した新型では、すべてをCPUで高速に処理することができる。これにより、製品の開発コストが削減できる」と説明し、「現在、この高性能CPUを搭載したシャーシ型アクセス制御スイッチの開発も手がけている」と語った。

またプリンス氏は、2008年夏に同社の日本法人を東京に設立する計画を明らかにし、日本市場の開拓に本腰を入れると語った。なお、同社の製品は、国内ではマクニカネットワークス、日商エレクトロニクス、ノックスの3社が販売している。

米国コンセントリーネットワークス
<http://www.consentry.com/>